

## 日本語で学ぶ力を育む JSL カリキュラムの取り組み

伊藤 康次（墨田区立錦糸小学校長）  
安西 由香里（墨田区立錦糸小学校 第2学年担任・  
外国人児童生徒支援担当）  
高岡 忠史（墨田区立錦糸小学校 第4学年担任）  
中野 裕美子（すみだ国際学習センター）

### 1. はじめに

墨田区立錦糸小学校は、JR 総武線錦糸町駅北口にあり、ホテルや音楽ホール、飲食店などの繁華街の中に立地している。全校児童約230人中、約44%が外国につながるのある児童であり、約17%の児童が日本語の支援を受けている。日本を含め11カ国の児童がともに学ぶ都内有数の国際色豊かな学校である。

本校には日本語加配教員が2名配置されている。さらに、墨田区教育委員会指導室所管の「すみだ国際学習センター」が設置されており、本区における外国人児童・生徒支援の拠点校として位置付いている。

日本語の支援が必要な児童に対して、「語彙や文型」、「聞く・話す」、「読む」、「書く」の観点から個別の指導計画を作成し、日本語加配教員、及び、すみだ国際学習センターの指導員、支援員と連携しながら主に日本語の習得に重点をおいた支援を行ってきた。

しかし、年々、外国につながるのある児童が増加するのに伴って、次のような課題が出てきた。

- ①日本語が全くできない（いわゆるサバイバル期）児童の増加
- ②児童一人一人の日本語習得状況の把握と学年進行、中学校進学への引き継ぎ
- ③在籍学級における学習参加、教科を学ぶ力の育成

そこで本校では、日本語加配教員、すみだ国際学習センターと連携し、日本語指導と教科指導とを統合したJSLカリキュラム<sup>1)</sup>による教科指導を推進し、対象児童に日本語によって教科を学ぶ力を育み、積極的に学習参加できる意欲の向上と学習内容の基礎を定着させることを目的とした研究に取り組むこととした。

### 2. ユニバーサルデザインの考えに基づく授業デザインと JSL カリキュラムの推進

#### 2. 1. 全学級で取り組む JSL カリキュラム

本校では、校内研究のテーマとして、ユニバーサルデザインの考え方に基づく授業づくりに取り組んでおり、まもなく3年が経過する。前述のような本校の実態、さらには、特別に支援が必要な児童が多く在籍していることから、指導方法を工夫改善し、一斉指導の中でより多くの児童が授業に参加し、「分かった、できた」という達成感や楽しさを味わえるような授業のあり方について研究を重ねている。

特に今年度は、昨年度までのJSLカリキュラムの成果を生かし、全学級で算数科を通してJSLカリキュラムの視点を活用した授業づくりを目指しとしていくこととした。算数科が、本校の児童の課題となっている教科であること、また、言葉だけではなく、数字や記号、図などを用いて学習するという教科の特性があり、外国につながるのある児童も含め、全ての児童に対する指導

の手立てを講じやすいという理由から算数科に焦点を当てて実践的研究を進めてきた。

実際の授業の様子については、後述するが、研究実践を通して、「知っている言葉や分かる言葉に言い換える」、「視覚化する」、「キーワードを示す」、「例示する」、「モデルを示す」、「参加、表現することへの安心感を与える」など支援が大切であることが明らかになった。また、このような支援は、JSL 児童はもちろんのこと、特別に支援が必要な児童も含め、全ての児童にとって「わかりやすい」指導の工夫であるということを全教職員で共通理解することができた。

## 2. 2. 日本語教室における学習の様子

日本語の支援が必要な児童は、取り出しによる日本語教室にて、日常生活に必要な日本語習得や在籍学級での教科学習に積極的に参加できるよう学習支援を行っている。

具体的には、日本語加配教員とすみだ国際学習センターの指導員、支援員とが協働しながら、児童の日本語の能力や学習歴などに応じて、①「サバイバル日本語」、②「日本語基礎」、③「技能別日本語」、④「日本語と教科の統合」、⑤「教科の補習」の5つのプログラム<sup>2)</sup>に分け、組み合わせで指導している。

④「日本語と教科の統合」のプログラムにあたる児童が、いわゆる JSL 対象児童となる。日本語教室で行った JSL 算数の実践として、次の一例を紹介する。

- 1 単元名 第3学年 JSL 算数「小数」
- 2 単元の目標
  - (1) 算数科の視点から
    - ① 小数の意味や表し方を理解する。
    - ② 小数を表すときは、整数と同じ仕組みで考え、その大きさを捉えることができる。
  - (2) 日本語指導の視点から
    - ① 理解支援 「0. 1 の～個分」、「0. 1 を～個集めた数」の表現に慣れ、意味を捉えることができる。
    - ② 表現支援 小数を書き表し、読み方に慣れる。
- 3 主な学習活動
  - (1) 任意単位量「1 あん」(実測 20 cm)をつかって、リボンの長さを測る。
  - (2) 「1 あん」に満たない「端の数」があることを理解する。
  - (3) 「1 あん」のリボンをミシン目に沿って10等分し、さらに小さい「あん」があることを実感する。
  - (4) 10等分した中の1個分を「0. 1 あん」ということを理解する。
  - (5) 「0. 1 あん」を使って、様々なリボンの長さを実際に測り、「0. 1 あんが～分」という表現の仕方に慣れさせる。
  - (6) 算数用語として、「小数」、「小数点」、「10等分」等の意味を理解させる。

このような学習を在籍学級に先立って日本語教室で学習することによって、児童は、学級における学習内容の理解が深まり、意欲的に授業に参加する姿が見られた。今後は、日本語教室における先行学習が単に学習内容の予習にとどまることなく、具体物の操作や数学的思考法など JSL 児童がもっている「学ぶ力」を伸ばすような指導が課題となっている。

### 3 第4学年における研究授業

#### 3. 1. 主な学習内容

<p>1 単元名 第4学年 JSL 算数「計算のきまりを調べよう」</p> <p>2 単元の目標</p> <p>(1) 四則混合式や( )を使った式によさに気づき、計算方法を工夫しようとする。</p> <p>(2) 四則混合式や( )を使った式の計算の順序について考え、式の意味や計算の仕方を説明することができる。</p> <p>(3) 四則混合式や( )を使った式の計算のきまりを用いて計算することができる。 (4) 四則混合式や( )を使った式の計算の順序やきまりを理解する。</p> <p>3 主な学習活動</p> <p>(1) 買い物をしている二つの動画を見て、買い物の仕方に違いがあることを理解する。</p> <p>(2) 買い物をしている動画の場面を言語化し、問題場面を把握する。</p> <p>(3) 問題場面を分析し、立式する。</p> <p>(4) 既習事項を生かして二つの式を一つにする方法を考える。</p> <p>(5) 計算のきまりを確認し、適用問題に取り組む。</p>
---

#### 3. 2. 第4学年の児童の実態

- ①外国につながる児童が約半数在籍、日本語教室へは10名が通室。
- ②問題文や指示の理解、表現することが難しい児童。
- ③母語で漢字を使用するため、漢字から問題文をある程度予想できる児童。
- ④生活言語はある程度獲得しているが、学習用語の意味や使い方が定着していない児童。
- ⑤日常会話には支障はないが、数学的な考え方が身に付いていない児童。

#### 3. 3. JSL カリキュラムに基づく指導の手立て

- ①問題場面の動画化（問題場面をイメージ化することができる。授業の途中で繰り返し動画を見直して、具体的な問題場面を確認する。）
- ②まとめの書き方を工夫（キーワード化、色を変えて板書する視覚化、まとめの言葉を穴埋め形式にすることで、まとめを自分で書くことができる。）
- ③「言い換え」、「絵」、「動作化」（本時では、買うものをまとめて引く場面をイメージ化させるために「買い物カゴ」の中に商品がある「絵」を示し、「まとめて計算する＝( )を使う」という計算の工夫につなげた。）

#### 3. 4. 研究授業の成果と課題

日本語教室と連携をとり、個別の指導計画などを基に、通室している児童について話し合ったことで、学級では見取れなかった実態を知る機会となった。また、問題場面を動画化することで、「まとめて買う」( )を使った式)と「順番に買う」の違いがわかり、課題把握が明確となった。一方で、教師が使った「引くー引いても」という言葉の活用形に戸惑う場面があり、講師の早稲田大学教授 池上 摩希子先生からは、語彙理解は、その言葉を「知っているか」ではなく「どのくらい深まっているか」が大切であるという御指導をいただいた。

### 4. すみだ国際学習センターと連携した DLA と個別の指導計画

2014年に、文部科学省から発行された『外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント

(DLA)』<sup>3)</sup>を使い、夏季休業中にすみだ国際学習センターの指導員が、第2学年から第6学年までの計26名の児童にDLAを実施した。実際のアセスメントでは、児童の話している内容をICレコーダーで記録し、音声データをもとに児童の実態を分析した。ICレコーダーを活用することで、例えば、「どのくらいの長さの文で話すことができるか」、「読んだ内容についてどのように再話することができるか」といった児童のもっている日本語力の把握に効果的であった。

実際の分析例として、

①児童B…普段は自ら積極的に話す姿があまり見られないが、DLAの結果から、日常会話や学校生活の中で多くの語いや表現を獲得していることが分かった。また、母語で知っていることは日本語に変換し、まとまりのある文で話をする你也可以も把握できた。

②児童C…日常生活でよく使う語彙・表現は聴いて理解することができているが、教科に関する話は理解することができない。

個別の指導計画には、DLA等で把握した児童の日本語の力を「日本語基礎」、「技能別日本語」、「日本語と教科の統合学習」の三つの視点に基づき「文字・語彙」「文型」、「話す」「聴く」「読む」「書く」、「JSL教科」の7項目について、児童の実態や課題、DLAの結果を記載する。

「話す」「聴く」「読む」「書く」の目標は、文部科学省のウェブサイト「かすたねっと」にある「特別の教育課程」の日本語の学習目標例とリンクさせ、そこから選択できる様式としている。

学習目標例に示された項目を使い、児童の日本語の力について担任や関係する指導者間で協議をするとともに、評価、改善を図りながら、学級での教科学習に参加するための支援や手だてに生かしたり、次の学年につなげたりしている。

## 5. 本校における日本語指導の課題と今後の展望

本校では、日本語支援に関わる校内組織として、次の2点がある。

①日本語支援委員会(月2回程度)…管理職、日本語加配教員、外国人児童・生徒支援担当教員、すみだ国際学習センター指導員で構成。必要に応じて、在籍学級担任も参加。

②センター会議(月1回)…担当指導主事、すみだ国際学習センター、日本語支援委員会。

しかし、通常の学校では、担任が一人で日本語支援を必要している児童の指導を担っているのが現状である。本校においても、日本語教室に通室している時間以外の大半を在籍学級で生活している。特に「サバイバル期」の児童も在籍学級の授業に参加できるようにするためには、どのような支援が必要なのか、また、学ぶ力はあるが言語の力が不十分なため、自分の考えを表現できない児童をどう支援するかなど具体的な手立てについて研究途上である。

さらに、今年度は算数科に特化して実践を積み重ねてきたが、他教科についてはまだ研究は深まっていない。他の実践事例を研究しながら、本校におけるJSLカリキュラム教科指導の一層の充実を図る必要がある。

そのためには、前述の日本語支援に関わる二つの校内組織を一層活性化させ、全校で日本語支援が必要な児童への指導体制を確立する必要がある。今後は、このような研究の成果を広く区内に発信し、日本語支援拠点校としての役割を果たしていかななくてはならない。

注 1)～3)とも文部科学省が開発したものであり、次のHPで公開されている。

文部科学省初等中等教育局国際教育課ホームページ CLARINET へようこそ

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/003.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003.htm)